



神奈川県立
菅高校
教諭
田中講平先生(40歳)

学ぶ環境を整え、一人ひとりに似合う「進路」を一緒に考え、導けるような存在でありたい。

革ジャンがトレードマークの田中講平先生。教師という立場であるものの、「教える」という感覚で、生徒に接するのが好きではない。生徒と同じ目線に立ち、横から寄り添うようにして大事なことを伝えていきたいと言う。

卒業後の自分を意識させ、その気にさせる

菅高校に赴任した5年前から、学年の進路指導を担当する田中先生。

「世の中のしくみを学ぶ環境を整えてやりたいし、仕事にもいろんな選択肢があることを伝えたい。入学した時には個性のない服、自分に合わない服を着ている生徒たちに、こういう服を着たいという意志をもたせ、自分に似合う服を見つけて卒業させてやりたい」と言う。そのため1年次には生活習慣や基本的マナーの習得に力を入れ、同時に職業人インタビューや社会人講話など進路行事を充実させるなど、進路への意識を高める工夫を続けている。

田中先生がキャリア指導において何より大事にしているのは、生徒に卒業後の自分を意識させること。

「これはあくまで私見ですが、自分や周囲の友人などの生き方を振り返ってみても、高3の時の進路選択は40歳くらいまでの人生を決めてしまう重要な節目になる。生徒にもいい加減に進路

を決定すると20代以降、苦勞するかもしれないよ、と話しています」

田中先生自身、4浪して美大へ入学。卒業後は専門学校の講師として働いた。そこで、専門学校の系列の通信制高校でケアの必要な高校生の指導に携わり、「自分が教師になれば、もっと何かできることがあるはず」と一念発起。30歳から教員試験を受け始め、4度目の正直で合格し、35歳から現職というユニークな経歴の持ち主。

「細かな紆余曲折は生徒に話していませんが、僕自身、優秀ではなかったからこそ、どこで人がつまづくのかが、他の人より予想しやすい。勝つまでやってみないと負けっぱなしになることも身をもって実感している。そういった経験を生かしながら、生徒一人ひとりの特性に“ばっちり似合う進路”を一緒に探してやりたいんです」

学びの継続力を養うため「学び直し」をスタート

意欲に火をつけるには一人ひとりを見ていくしかない。そう田中先生は考え、

生徒全員を覚え、親しみをもって下の名前で呼ぶ。その方が距離も縮まり、本音に触れることができるからだ。「もともとおせっかいで、放っておけない性格なので、気になる生徒には何度でも声をかけます。何も考えていないヤツが一番困るんだけど、“それでいいのか”と何度も声をかけていると“このままじゃマズイ”って気づいてくれる。その繰り返しで、気持ちが爆発するのを待つという感じです」

昨年の卒業生に、3年次になって「短大で英語が勉強したい」と言い出した生徒がいたそうだ。田中先生はAO入試のための文章作成の補助と面接指導を続けた。その甲斐あって、見事に志望校に入ったそう。「自分でやると言い出した子は必ず結果を出します」。ただ、心配なのは入学後。基礎学力が十分でないがゆえ、授業についていけなくて退学するケースも増えているからだ。「実情に危機感を感じ、今年度から『学び直し』を学年でスタートさせました。中1レベルから1日10分ずつ。そこで“やればできる”という喜びも味わってほしいなと思っています」



「進路の手引き」は今年の生徒に合わせた改訂版。「菅ナビ」は学びの基本や授業の受け方、生活習慣などを1年生用にまとめた冊子、左のノートはアイデアノート。

fan message



田中先生は進路指導をはじめ、何をやるにしても前例に固執せず「そのやり方が本当に良いかどうか」を必ず検討します。生徒のタイプも質も毎年変わるので、3年前のやり方が今の生徒にマッチするとは限らないからです。また、生徒一人ひとりを深くじっくり見ており、その上でその子に合った指導を実践しています。(神奈川県立菅高校 教諭川村正明先生)

profile

1975年福岡県生まれ、神奈川県育ち。神奈川県立鎌倉高校卒。武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業後、絵画塾へ2年間通い、県内の美容専門学校で講師として勤める。そこで絵画を約7年教え、34歳で教員採用試験に合格し、35歳より同校へ赴任。現在は校内の研究開発グループに所属し、学習支援(特進プログラムと学び直し)を担当。担当教科は美術。観戦専門のサッカー部と美術部の顧問も。